

The background of the cover is a dark, textured, reddish-brown surface, possibly a piece of fabric or a wall. In the lower half, there is a large, dark, metallic, and jagged object that resembles a skull or a piece of armor, with sharp, pointed edges. The overall tone is dark and ominous.

DIABLO[®]

IMMORTAL[™]

本能

RYAN QUINN
作 ショートストーリー

ストーリー
RYAN QUINN

イラスト
SANGSŌŌ JEŌNG

編集
CHLŌE FRABŌNI

伝承顧問
MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ顧問
MAC SMITH, SEBASTIAN STĒPIEN

制作
BRIANNE MESSINA,
CARLŌS RENTA

デザイン
CŌREY PETERSCHMIDT

スペシャルサンクス
ŌTIS BLUM, JUSTIN DYE, SCŌTT SHICŌFF,
MATTHEW BERGERおよびサンクチュアリに新たな
血を解放した過去と現在の「ディアブロ イモータル」チ
ーム。



本能

キ

ングスポーツ東部は黄昏時になると、人々が姿を消しはじめる。アロディは街が急に荒廃することに慣れてはいたが、それでも不快な気持ちは拭えなかった。

彼女は屋外のトンネルと呼ぶほうが相応しい街を、目的を持って歩いた。狭い道が暗闇の中で果てしなく傾斜している。両側には水浸しの古い木造住宅が並んでおり、これ以上小さくできないほど分割されていた。惨めで貧しい者たちのための差し掛け小屋と呼ぶべきだろう。

ミュールズ・アベニューの住居はあらゆるものから巧妙に隠されていた。目には見えないが、少なくともアロディはここで海の匂いを嗅ぐことができた。ふ頭から叫び声と罵声が伝わってくる。ほとんどの角が行き止まりだった。死に際の魚が、目につかないところで断末魔の叫びをあげている。腐臭がした。

キングスポートのスラム街の唯一の救いは、自分が何をしているかなど誰も気に留めないことだった。彼女はいとこから一定の距離を保ちながら、カビの生えた石畳の上を歩いた。

「早くしろ」とボイスは眩き、振り返りもせず速足で急いだ。いまだどこへ向かっているのか教えてくれない。

ボイスは彼女より年上で痩せ細った身体をしており、血の気が多く、鼻が非常に高くてどの角度から彼の顔を見ても目立つほどだった。彼のコートはブロードソードを隠すのに十分な大きさだった。アロディは柔らかくて細い髪をきつく束ねていた。彼女は仕事用の無骨な手袋をはめていた。彼女たちは「取引」のための服装に身を包んでいた。

キングスポートで一家のためにしたことの中で、彼女は人と取引をすることがもっとも苦手だった。

仕事の管理は重労働だった。配達のための御者を手配する、どの木箱を開けてどの木箱を封印するかを把握する、そして万が一捕まった場合、見張りにいくら賄賂を渡すかを確認する...アロディは取引が得意だったが、あまりに数が多いため、一日の終わりには疲労困憊だった。それでも、金払いはよかった。また、出荷指示は頭を使わない作業だったが、早く終わればアロディは仕事を途中で抜け出すこともできた。彼女は思い深い夜にすることで、退屈さを凌いでいた。その年の初め、彼女はリンと一緒に泥酔し、一家の馬車の革製の幌に牛の血で"ALMS"と書いたことがある。

翌朝、馬車は綺麗な状態に戻っていた。誰も罰せられなかった。誰もそのことに触れなかった。アロディはボイスの老母、つまり家長自身が顔をねじのようにしかめて、呪いの言葉を連発しながら召使いに指示を出す姿を想像するだけで何時間も楽しめた。

リンは、あまりにも長い間アロディの唯一の友人だった。何が二人を結びつけたのかアロディ自身もはっきりとわかってはいなかったが、何が二人の距離を縮めているのかは知っていた。リンは詩人の心を持っていた。彼女は朝から晩まで店で働いていたが、いつでも二人が最高級のシルクを着られるように手配していた。アロディは彼女がうらやましかった。少なくとも、リンは家族の一員ではない。誰かと「取引」する必要もない。

取引が必要なのは、いつも最悪な人間だけだった。彼らは蛭のように寄生する。借金からはじまり、次に金を借りて、次に支払いを踏み倒そうとする。

そして、アロディはいつも蛭と取引をする羽目になった。彼女のいとこたちは「過剰」になる傾向があり、彼女は日付と金額を決めて蛭の恐怖を和らげ、その間に息子たちが騒ぎを起こす。蛭が怪我をする前に助けてあげているのだ。たとえ、そのほとんどが怪我をするのが当然の報いだったとしても。

この一連の流れも、その必要性も、すべてが恥ずべき行為だった。なぜ人はもっとまともになれないのだろうか？

ボイスはノーガーデンの道先導した。木と石でできた迷路のような道を、数秒おきに角度を変えながら進んでいく。もし誰かが見ていたとしても、窓ガラスを覆う汚れが酷すぎるため、アロディには見えない。汚いまま放置する人がいるのも当然だった。窓の向こう側で卑劣なことが起きていることを彼女は知っていた。

アロディは迷い、少し吐き気をもよおした。彼女はボイスを試そうとした。「蛭は誰？」

ボイスはいつものように、振り返りもせず、彼女の問いかけにも応じなかった。彼は角を曲がったところで姿を消した。

角を曲がると、いとこがコートの下にあるものをいじっているのが見えた。ボイスはようやく、そして幸いにも、彼女の見覚えのある茶色い長屋のドアの前で立ち止まった。

アロディは一晩中自分の注意をそいでいた数えきれないほどの煩わしさを一瞬にして忘れた。彼女の心臓と内臓が石畳を突き破って落ちるほどの衝撃だった。焦る気持ちで指が強く握りしめられていく。

リンの店の看板が、夜風に吹かれてきしみながら前後している。

ボイスは彼女に向かって微笑んだ。彼の薄汚れた歯が見えた。

「強くなれよ」と彼は言った。「本能を受け入れろ。すぐに終わる」

そう言うと彼は振り返り、ドアを蹴破った。



「どうしてこんなバカなことをしたの？」アロディは唯一の友人に向かって叫んだ。

彼女がすべての業務を遂行できることをよく知っていたのに、彼女を抑圧していた。だから、彼女は狩りの本能に欠けると言っていた。殺人鬼としての本能に。

アロディは自分の姿が見えなくて良かったと思った。どんな顔をしていたのか、想像に難くなかった。唾は飛び、首と額に血管が浮き出て、顔は赤紫色に紅潮しているだろう。実にグロテスクだ。

彼らはリンを店の椅子に縛り付け、後ろで両手を縛り、椅子を倒して地面に押し付けていた。彼女を怯えさせるためだけに。現場は既に荒らされていた。奥の壁にある機織り機を囲むように、羊毛やウサギの毛皮が山積みになっている。革は不揃いに吊るされ、机の上には凝固した染料の入った瓶が置かれ、床には糞がそこら中に散らばっていた。天井は低くたるんでいて、2階のテナントが上に乗っかっているかのようだった。

散らかった空間の向かいにある開けっ放しのタンスには、何ヤードもある上質のシルクが綺麗にたたまれて置かれている。

アロディはシルクを指差した。一家が配達したものだ。彼女は部屋中を指差した。「こんなに与えてやったのに。期限内に支払えばなんともなかったのに」

リンはとめどなく涙を流した。彼女の小さな顔はリンゴのように丸く、泣くことで余計に小さく見えた。首にはブルーとゴールドのアスコットタイが巻かれ、短い赤茶色の髪には、皮なめし職人から盗んだバラの粉とワックスで手入れされていた。アロディはそのことを知っていた。見張りをしていたからだ。

リンは完全なる懇願の表情を浮かべていた。良かった。それは、彼女が従順であることを意味しているからだ。アロディは彼女を立たせるかのように、椅子に手をかけた。「ひと月以内に200を返してくれるなら——」

ボイスが口を挟んだ。「約束を守れないなら、最初から約束なんかするな」彼の言葉づかいは見た目どおり、粗野だった。

途端に、リンの顔が反抗的になった。身体に残るあらゆる信念が砕け散った状態で、できる限り反抗的な態度で臨んだ。

「黙りな、鼻デカ」と彼女は吐き捨てた。「あんたのママが飼い猫に目を食われて、猫が悪魔に食われると願うよ」

リンは不作者者ではない。彼女が言うことも一理ある。ボイスの母親は酷い人間だった。

ボイスは何も言わず、ただコートを開けてツインヘッドハンマーを取り出した。それを1つずつ染料入れに通して、ガラスやコバルト色のパルプを店内にまき散らした。リンは叫んだ。アロディはガラスが飛んできたときに目を覆い、降り注ぐのが止んだ時に切り傷を確認したが、何も感じなかった。

するとボイスはリンの口に雑巾を詰め、椅子をひっくり返し、ハンマーを持って机に向かった。

「やめて」とアロディは大声で叫び、彼がそれ以上酷いことをするのを阻止した。

「やめたら、どう落とし前をつけるんだ？」ボイスはハンマーを振りながら言った。まるで2人を解決すべき問題であるかのように、彼は2人を交互に見ていた。

アロディはリンの顔をちらりと見た。彼女の口も目も大きく開き、眉毛は上に上がっていた。ただただ、怯えていた。

「金を返すだけじゃ足りない。支払う分の他に100ゴールド上乗せする。あんたを煩わせた手数料として。ひと月以内に返す。だよ、リン？」

リンは頷いた。取引において、これはひとつの戦略だった。一度でも力を見せれば、相手は――

ボイスはアロディに向かって、じっくりと長い一歩を踏み出した。彼はハンマーをしっかりと握っていた。

「それじゃあ何も学ばないだろ。それは…」彼は次の言葉をためた。「…分不相応に寛大だ」

アロディの心臓は激しく鼓動した。彼女の表情に出ていないことを願った。今、彼女は両方と取引をしなければならない。

「わかった」と彼女は返事をした。「リンは2週間で金を返す。私がそれを回収に行く。そして、1ヶ月間、あんたの仕事を私が引き受ける」譲歩。時には、譲歩がうまく行く場合がある。相手を尊重していることが伝わるからだ。

「お前は本当に“本能”がないんだな」と、ボイスはハンマーを握る指を曲げながら言った。まるで悲しんでいるかのような声だった。

彼の母親は“本能”のことを嬉々として話すため、ボイスもそうだった。彼女がすべての業務を遂行できることをよく知っていたのに、彼女を抑圧していた。だから、彼女は狩りの本能に欠けると言っていた。殺人鬼としての本能に。

しかし、アロディにはしっかりと宿っていた。彼女もそれを証明してきた。

ある一定のところまでなら。

「こいつが俺たちの生活を奪うなら、俺たちもこいつの生活を奪うべきだ。理にかなってるだろ？」ボイスは振り返り、ハンマーを振り上げ、椅子の下にうずくまっているリンを見下ろした。

リンはさらに身体を縮こまらせ、口封じの間から何かうめいた。

「お願い」とアロディは言った。

ボイスは椅子につかまって安定させた。

アロディは、彼が何を考えているのか知っていた。本能に支配されたのだ。

「あんたは底なしのバカだ。彼女の手をめちゃくちゃにしたら、彼女はもうやって金を返せばいい？」それはあ——」

彼はハンマーを強く振り下ろした。

リンは椅子の下でのたうち回った。彼女が言おうとしていることは、何もかも言葉にならなかった。口封じのせいではない。自分ではどうしようもなかったからだ。それほど痛みだった。

ボイスが椅子を立たせて手首を外すと、彼女は震え上がり、よだれを垂らしていた。リンの右手は穴が開くほど砕け、爪の下、皮膚を裂くポロポロの小さな裂け目と、いたるところから血があふれている。彼女は片方の腕を抱え込むようにして、前後に揺れた。

アロディは直視できなかった。彼女はボイスの方を見つめたが、当の本人は少し汗ばんでいるだけで、何もしていないように振舞っていた。

「これで何も手に入らなくなったじゃん」と、アロディは憎悪を込めて彼を嘲笑した。「損しかしない。バカだね」

ボイスは肩をすくめるだけだった。「こいつは絶対払う。2週間、仕事をするより早く金を返せる方法がある」彼は片手でリンをドアの方に引っ張

った。彼女はまだ口封じの奥で泣き叫んでいる。

彼の淡々とした態度に、アロディは冷やひやした。「どこに連れていくの？」

彼は何を考へてるんだ？彼女の身を売り飛ばすのか？労働させるつもりか？手がボロボロの状態で？

ボイスは再びアロディを無視した。「こいつはもうお前の問題じゃない」

彼はそう言い、アロディの足元にリュックサックを蹴りつけた。藁が宙を舞った。「シルクを取って、金目になりそうなものは何でも詰めて、家に帰れ。明日話そう」

アロディの顔は真っ赤に燃えた。こいつを止めるべきだ。殴ろう。とにかく、何かした方がいい。

だが、彼の本能の方が遥かに強かった。

リンはボイスに引きずられながら店を出る時も、アロディから目を離さなかった。



アロディは、縫い目を裂くようにスラム街を抜けていった。遅く。逆走するように。必要以上に感情に飲みこまれていた。

取引がうまくいかない蛭を助けようと思ったことはなかった。だが、リンは蛭なんかではない。少なくとも普通の蛭とは違う。

蛭の才能を一家に称えることなんてしなかった。取引のために蛭をテーブルに招くことなんてしない。

蛭の仕事がうまくいったとき、二人で上流階級より良い服装で上流階級を襲撃することなんてしない。放蕩家も詩人も、自分に媚びなかった。太陽が顔を出すのを怖がるほど楽しい夜を過ごした。

蛭を見守ると約束したことなどなかった。蛭が同じように約束することもない。

リンは、一家と仲が良いから特別扱いしてもらえんと思ったのかもしれない。あるいは、アロディが彼女にそう思わせていたのかもしれない。

だから、彼女はボイスのずっと後ろにいて、スラム街が再び健全な姿に戻るまで、ミュールズに点在する食堂に寄りかかりながら、人目につかないようにしていた。アロディはふらふらと歩いていた。狩人ではなく、放浪者のように。ボイスがさらに数人の仲間と合流し、彼らが暗い色の何かを荷車に押し込むと、アロディはぎりぎりまで歩みを進めた。目的を持った放浪者のように。

いとこの荷車は西へ北へ、汚れた石畳の上を進んだ。4人の人物と荷車。出荷が間近であることを示している。彼らの夜の稼ぎはリンより大きいだろう。

しかし、彼らはふ頭から離れたところへ向かっていた。少なくとも、彼女をバイルフェンへ出荷する様子はない。

アロディはボイスの後を1時間、止まることなく追いかけて、青緑色の派手なバナーを掲げた常に開いている北門を出て、道へ入っていった。身を隠せるスラム街がなくなった彼女は、フクロウの鳴き声をするたびに怯えながら、暗闇の中を忍び足で歩いた。彼らの松明の小さな明かりは小道から林の方へと進み、豊かな土の腐った匂いと海の香りがまじりあっていた。

そして、彼女は待った。動き出す前に数分間、彼らが先に進む時間を与えた。アロディは、彼らがどこへ向かっているのかなんとなくわかっていった。

一家は新しい旅に出る前に乗り手と荷物を交換するために、町から遠く離れたソルターウッドの端っこに荷馬車の停留所を構えていた。アロディは何度もそこまで歩いたことがある。

停留所は樹冠が濃くなり始めたところにうまく隠されていた。ボイスは四輪の大きな荷馬車の後ろで手を払い、その数ヤード先にも2台の荷馬車が停まっていた。3台とも革の幌が付いていて、後方は開いているが中は薄暗く、荷物は隠されていた。

アロディは馬が鼻を鳴らして足踏みする音と、御者たちが会話をするくぐもった声を聞いた。彼女は林床に低くしゃがみ込み、ミミズや苔や動物の糞がまみれる地面に手をつけた。茂みや茨が彼女の皮膚を刺す。

ボイスと彼の仲間、つぶれ頭のラクランと太首の男2人は、重量のある棍棒や棍棒を兼ねた松明を持って、暗闇の中で彼女の方へ振り向き、動き出した。一家の中にはギャングから渡ってきた者もいると彼女は思い出した。

本能のかなりの部分が、これから起こり得る結果を無視していたのかもしれない。

彼らは険しい顔をしていて、死んだように静かだった。いつもなら、一人が質の悪い冗談を言う。特に何もなければ、金を何に使うかについて話していた。そして、彼らは登りの時よりも速く歩き、まるでホリネズミのように頭を振り回した。まるで、その場を収めたいかのように。

アロディは舌を強く噛んだ。彼らの松明がどんどん近づくにつれて、彼女は新たな痛みが湧きあがるのを感じた。夜を照らし、茂みに隠れている彼女を見つけようとしているのでは、と。

彼女はボイスを見た。彼を凝視した。彼は確かに強い本能を持っているが、無敵ではない。彼の瞳はほとんどが黒い瞳孔で、柔らかくしなやかなゼリーのような質感だった。喉は細く、潰すのに十分なほど剥き出しになっている。棍棒や鋭利な枝、あるいは店内から手袋一杯の割れたガラスを持っていれば絶好のチャンスだったのに。

彼は彼女のすぐそばまで歩いてきた。アロディは膝を曲げ、拳を固く握りしめた。もし見つかったら、先に攻撃すればいい。

しかし、それからどうする？彼女の拳は碎かれるだろう。奴隷として売り飛ばされるかもしれない。ボイスの言う通りだった。彼女には本能がなかった。ふりをしているだけだった。

あるいは、彼女がちゃんと聞いていなかったせいかもしれない。彼は気が散っていた。彼に無視され、見逃された...好機だったのに。彼にはかなわないと本能は知っていた。

音もなく、アロディは下草の中に身を沈めた。

一行はアロディの隠れ場所の前を素早く、かつ決然と進んだ。松明の明かりは視界から消えていった。気がつくと、彼女は息ができるほどの影に包まれていた。前方では3台の荷馬車が土砂を巻き上げながら軋み、先頭の馬たちが鞭の音で牽引していた。

踏み出すのが早ければ、一家に見られてしまう。しかし、馬が走り出せば絶対に追いつけないだろう。

ボイス一行から目を離さず、まだ背中を向けて撤退しているところを想像しながら、アロディは一番近い荷馬車に忍び寄った。馬の悪臭と森の腐敗が立ち込める中、咳き込まないように必死に耐えながら息を潜めた。

各荷馬車の先頭には御者が座り、座席の横には長い鞭と2本の松明が備え付けられている。彼らは鞭を振り回し、互いに命令を連呼した。口笛を吹き、叫び、気を取られている。先頭の馬たちが疾走しはじめた。

本能のかなりの部分が、これから起こり得る結果を無視していたのかもしれない。

アロディは突進した。荷馬車の後ろの段差に片足をかけ、体重をかけて乗り込んだ。仰向けに強く着地し、身体を風がかすめるのを感じた。

地獄を目の当たりにした彼女は、息も絶えだえであることに感謝した。



荷馬車の中は絶望が凝縮されていた。身体は互いに重なり合い、壁に押しつけられるように倒れている。喘ぐように半呼吸をするポロポロの灰色の姿は、野兎のように鉄の支柱にくくりつけられている。数人は靴を履いておらず、足が折れて関節が紫色になっていたり、手が潰れて爪がかるうじてぶら下がっていたりするような状態だった。ほとんどは目隠しをされ、全員に猿ぐつわが巻かれていた。頭は力なく、だらりと垂れている。上からの小さな松明で照らされた彼らは、人間というより人影のようだった。

ボイスの母親、つまりアロディを含めた一家全員が、多くのものを出荷していた。当然、“良くないもの”も出荷していた。しかし、これは彼女の想像の範疇を超えていた。

アロディは吸いたくもない空気を吸い込んだ。

立っていられなくなったが、すさまじい光景で胃が気持ち悪くなっただけではない。荷馬車はものすごい速さで進んでいた。馬に引かれながら、木々の密度が高い北の方へ進んでいく。その経路だと、ソルターウッドを車輪で通れなくなるほどの荒い道が待っている。一体どこへ向かっているのだろうか？

アロディはこちらに顔を向けた者たちの焦点の定まらない視線を避けながら、囚人たちの顔を見渡した。誰一人、見覚えがない。彼らも蛭だろう。とはいえ、彼女の蛭ではないのは明確だった。

その時、彼女は泣き出しそうなほどの焦りを感じたが、本能がそうさせ

荷馬車の外から聞こえてきた悲鳴が離れはじめていた。濡れたような低く喉を鳴らす音が代わりに聞こえてくる。アロディは混乱に満ちたものがく音や、喉をかきむしるようなさまざまな叫び声を聞いた後、沈黙が流れた。

なかった。あらゆる感情が喉の奥に塊として注がれた。

リンは奥の方に、他の2人の囚人のほほ上に乗っかるような形で横たわっていた。目を閉じ、縛られ、口をふさがれていた。ぴくりとも動かない。

アロディは身体を起こし、しゃがむ体勢になった。「シーツ」と唇に指を当てて、乗客たちにささやいた。はっきりと喋ったわけではない。自分の声が発せられるのを聞いた。強調するように、自分を叩いた。

「彼女を助けたい。その後にあなたたちを助けるから」この惨めな人々を助けることが果たしてできるだろうか？助けたとして、一体何になる？

鈍い呻き声が再び響く。壁際から、震えるような情けない呼吸音が聞こえる。アロディは、彼らが聞いたかどうかわからなかった。理解したかも定かではない。

彼女は囁き声に収まる限りの威厳を込めようとした。「音を立てるな」

アロディは苦悶する彼らの肢体に触れないよう、手のあらゆる動きを感じながら、じりじりと前進した。荷馬車の前方に近いところでリンが瞬きする姿を見て、全身が安堵するのを感じた。

リンの目は腫れていた。しかし、彼女はしっかりと視線を返し、意識がはっきりしているのがわかった。薬漬けにはされていなさそうだとアロディは考えた。出荷の最後の方に加わったことによる、不幸中の幸いだったのかもしれない。しかし、口の中の雑巾は革製の猿ぐつわに交換され、両手は柱にきつく縛られていた。

右手は醜い紫黄色に腫れ上がり、悲惨だった。折れているのは間違いない。治療師がどうこうできる状態でもないだろう。手仕事をするには細かい骨や筋がたくさん必要だ。

枝葉が荷馬車の側面に沿って擦れる。森がどんどん濃くなってきた。ア

ロディはリンの手首にかけられた縄をそっと外そうとした。その後足
を解放し、猿ぐつわを外せばいい。そしたら、2人で逃げられる。

リンの縄と格闘しているうちに、アロディの手が震えてきた。手先が
言うことを聞かなくて、まるで他人の手を操っているかのような
無骨な手袋が彼女の汗を吸い取ってくれているのがせめてもの救いだ。しか
し、結び目があまりにも多い。緩んだ箇所もない。とにかく時間がかかり
すぎている。

焦りながら、リンの無事だった手首を縛っている輪をひとつ解こうと
した。リンは猿ぐつわの中で呻き、目を閉じ、慌てるように息を吸いなが
ら、時間が経過するごとに増す苦痛に耐えた。

すると、アロディは御者が叫ぶのを聞き、荷馬車が減速しだした。彼女
はリンの拘束を必死に引っ張った。

小さな松明が2人の頭上に消えていった。誰かが座席から森の地面に降
りて、土の中をひっかきまわしていた。アロディは荷馬車の後方へ回った
が、足音は前方に素早く移動し、次いで馬の手綱が外される音が聞こえ
た。バタバタとうるさく去っていったようだ。御者は走っている様子だっ
た。

荷馬車には誰も入っていない。もしや見捨てられたのか？

リンが猿ぐつわの間から何か言おうとしている。彼女のことだから、ぐ
ちゃぐちゃになった手に関する冗談でも言うつもりだろう。綺麗でしょ？
それか、激怒するかもしれない。無理もないが。

アロディはリンの傷ついていない方の手首を自由にして、猿ぐつわを引
きはがした。

「私たちを出荷するつもりじゃないよ」とリンは小声で呟いた。「私た
ちはおとりなんだ」

アロディは外から材木が一度に何箇所も割れ、斧の一撃が森全体に降り
注ぐ音を聞いていた。

一人の恐ろしい悲鳴が宙を割いた。そして、立て続けに悲鳴の合唱が響
いた。



一時間とも思えるような長い一分が過ぎていった。荷馬車の外から聞こえてきた悲鳴が離れはじめていた。濡れたような低く喉を鳴らす音が代わりになり聞こえてくる。アロディは混乱に満ちたもがき音や、喉をかきむしるようなさまざまな叫び声を聞いた後、沈黙が流れた。

彼女の中に眠る本能が振るえた。あらゆる衝動が恐怖にかき消されていた。息をするたびに喉が燃える。ほとんど身動きできなかった。身体を震わせることしかできない。

リンは無事な片方の手を動かしながら、何も言わずに自分の足元の拘束を解こうとした。手先はおぼつかなく、2人につきまとう死の予感よりも遅かった。一人では抜け出せないだろう。

囚人たちは縄や汗でぬれた革ひもを引きずりながら、緩慢と周囲を見回し、くくりつけられていた柱から身体を引きはがそうとしていた。

荷馬車の中でわずかに立てるのは、アロディだけだ。彼女しか逃げられる状態にない。リンは彼女を見上げ、彼女の決断を気に掛けるようだった。彼女に懇願した。当然だ。

アロディが身を乗り出して、足の縄の下に親指を入れたとき、リンは頷いただけだった。二人で作業をしていると、土の上を重いものが引きずられるようなゆっくりとした摩擦音がアロディの耳に入った。リンの左足にかけられた縄を引っ張り、皮膚をズタズタにしながらも、そのことばかり考えていた。

荷馬車の前方が真っ二つに割れるまでは。

木の破片が周りに飛び散った。アロディはリンの無傷の腕を引っ張りながら、後方へ這いずった。

荷馬車が傾いた。3人の囚人が荷馬車から引き剥がされ、暗闇の中に消えていった。あちこちから一斉に悲鳴が上がる。

アロディは、血で染まった歯茎と、何本もの歯並びを垣間見た。鋸歯状の赤黒い触手が廃墟の中を飛び交い、彼女の肩を掴んだ。彼女が痛みを耐えながら身を引きはがすと、触手は別の囚人を捕らえて視界から消えるように引きずっていった。アロディは他の囚人には目もくれず、ただリンを前に進ませた。2人は荷馬車の折れ曲がった後方から急いで逃げた。

リンは縛られてしびれた足を引きずりながら、子供のような足取りで歩いた。前進するごとにアロディの肩に痛みが走り、2人は見覚えのない森の奥へと進んでいった。アロディの背後には3台の荷馬車の残骸が見え、赤色

が飛び散り、血が黄身のようにべったりと塗られている。頑固に固定されいまだに燃え続けている室内用松明が、ろうそくのように上から突き出ている。

一家が捧げものとして運んでいた身体があちこちに落ちている。赤いひも状の内臓が身体から出ている、マリオネットの糸のように束ねられ、引っ張られている。死んでいる者も、半死の者も、かろうじて生きている者も、全員が地面の上で一体となり、互いの動きや音に合わせるように悶えていた。

心臓の鼓動が鳴りやまないアロディはリンを土の上に引きずり、ソルターウッドの影の奥へと本能が許す限りの速さで入っていった。



おぞましい存在が、血のついた爪でソルターウッドを闊歩している。地面低く、囁くように動く。

木々は月明かりを遮るが、完全に消すことはできない。その目は暗闇のために作られている。

これまで何度もそうであったように、おぞましきものは数時間前に誕生した廃墟に留まった。瀕死の重傷を負った2人の死体には、爪と牙で切り刻まれた肉の残骸があった。わずかに残った皮膚はボロボロで、かつての姿とは大きく変わっていた。

死体は黄土色に染まった土の上に横たわっている。どちらもぴくりとも動かない。それが重要だ。

おぞましいものは死体を小突き、そのうちの1体を殴り貫いた。死体はビチャリという音を立てて倒れ、木っ端微塵になり、動かなくなった。

そして、それはもう1体の方へ迫った。同じ動きを繰り返した。

この死体は脱臼した顎を大きく開き、歯の間から腐敗した粘液をびちゃびちゃと出している。死にゆく虫けらのように、四肢を駆使しておぞましいものに向かって抵抗した。この状態でも強烈な攻撃を繰り返した。皮膚から突き出たカミソリのように鋭い突起がおぞましいものの皮膚をかすめるが、なかなか当たらない。

おぞましいものは死体をひねった。死体はポキリと音を立てて倒れた。目はくぼんでいて、赤い目やにが周りを覆っている。興奮状態の中で、その臉は一度も開かれなかった。

立ち上がり、甘い煙と腐敗の向こう側を見渡すと、おぞましきものは別のものを見つけた。視線は散らばった足跡に注がれ、林の密集地帯である東の方へと続いていった。土をつつき、立ち止まり、息を吸い込んだ。

あと2体。どちらも負傷している。

狩りはここでは終わらない。

おぞましきものに影が巻きつき、そして消え去った。



アロディとリンは夜に潜むものから必死に逃げた。暗闇がどこまでも続いている。一步一步進むごとに、森が浮かび上がってくるような気がする。

アロディは両手でリンの歩みを誘導した。本能が彼女を突き動かしている。誰もまともに考えられなかった。

枝が折れ、濡れた恐ろしい呻き声にたきつけられ、何時間とも思えるほど長い間走った。アロディの首筋の毛が、とめどなく立ち上がる。常にどこかから見られているような気がしたが、どこにいるのかわからない。誰が見ているのかもわからない。

数分おきに、強制的に逃亡を止められた。リングが遅くなり、休息が必要となるためだった。そうでもしなければ、アロディが受け止める前に彼女が倒れてしまうかもしれない。彼女の手の傷は、巻いた布の表までにじんで出血していた。

「もういなくなっと思う？さっきの...あれ...」リンが尋ねた。彼女は草むらにうつ伏せになり、息を静かにするように努めていた。

「油断しないほうがいい」とアロディは言った。

リンはただ表情をこぼらせながら、その場しのぎの包帯を引っ張り、なんとか直そうとした。

「たいしたことないよ。ボイスにはね」と、彼女に手を貸しながらアロディが言う。

以前、御者が馬を始末するのを見たことがある。その瞳に宿る信頼を見て、いつも悲しくなった。しかし、少なくともその時の感情は忘れることができた。荷馬車のそばで身動きのとれない体を、人形のように動かす姿だけは...
どうしても忘れられない。

「いまさら助けるつもり？」リンは茨の中から立ち上がり、皮肉っぽく笑った。

「あんたを見捨てたわけじゃないでしょ？」アロディは2人が歩き続けるように促しながら、返事をした。「知ってたら教えてあげたのに」

リンは黙った。

譲歩はうまく行く場合がある。彼女はもう一度試した。「もし私が何かしていたら、きっと2人とも殺されていた」

リンは唾然として彼女を見つめた。こんな悪夢に足を踏み入れてしまった自分に腹を立てているのかもしれない。あるいは、そうさせたアロディに腹を立てているのかもしれない。

「あのね、普通、賢い人は期日通りに払うもんだよ」アロディは批判を声に出さないようにした。失敗した。

リンは彼女を突き放して、自分の足で歩いた。さらに遅くなってしまった。

「仕事が上手くいかない人の気持ちなんてわからないよね、アロディは？」リンは吐き捨てるように反論した。「ここ数ヶ月、誰もミュールズに来なかった。だからアッパーで注文を受けようとした。景気が段々悪くなっただけなの」

思いとは裏腹に、アロディは勝てる戦いを求めて本能が湧き上がるのを感じた。「で、代わりに私たちに借金を背負わせることにしたって？」

「私たち？」リンは怪訝に見てきた。「あいつらがどんだけ稼いでる

か知ってるくせに。みんなクソだっていつもあんたが言ってたじゃん。私に2週間の猶予があったところで、あんたになんの関係があるの？」

「関係ないね」と、アロディは悟ったように言った。彼女は戦いを放棄した。リンは自由に反論する権利がある。

アロディはうっかり木の根につまづいたリンに向かって手を差し伸べた。「あいつらがもう片方の手をやりに来るときは、まず警告をする」

リンは惨めな表情で見つめ返した。「あんたに冗談を言う資格はない」

アロディは調子に乗りすぎた。一晩も経ってないのに。

「私があと2回冗談を言ったら、許してあげる」リンはにやりと笑った。「観客がいたほうが理想的だね」

森が静かになった。ひとまずゆっくり歩いてみることにした。2人で歩みを合わせた。



一時間経っても追手の音は聞こえず、生きているものも目撃しなかった。森は囁きをやめ、夜が明ける気配も森の濃さが和らぐ様子もない。2人とも震えていた。

遠くから、アロディが聞き覚えのある音を聞いた。液体を口に含んだ、死にかけの馬が鳴いている。近づくと、馬の腹が引き裂かれているのが見えた。リンは目をそらし、無事な方の腕で顔を覆った。

アロディはリンが樫の木に寄りかかれるように手伝い、馬が倒れた場所の近くを調べた。彼女は松明と火起こしを持って戻ってくると、リンの肩を持った。「どうするの...？」リンは質問を言い切らないまま、尋ねた。

アロディは問いかけを無視した。2人して急いでその場から逃げた。

以前、御者が馬を始末するのを見たことがある。その瞳に宿る信頼を見て、いつも悲しくなった。しかし、少なくともその時の感情は忘れることができた。荷馬車のそばで身動きのとれない体を、人形のように動かす姿だけは...どうしても忘れられない。

この場で動物が死にかけていて、音を出しているなら、追手の気を引きつけることができる。2人を狩ろうとしていたものが、別のものに気を取ら

一家の取り決めの恐ろしさが彼女を襲った。アロディは、彼らの事業が犠牲者を生むことを知っていた。しかし、こんなものに人を売ることが正当化する人間的な理由を、彼女は想像することができなかった。金のため？「これ」の飢えから身を守るため？一族の義務のため？

れるかもしれない。

彼女は2人が進んでいた道の反対側へとリンを追い込み、南へ下っていった。南なら多少の希望がある。あそこは木々が生い茂り、星を見ることさえもできない。粒状の湿った土が岩になり、花崗岩の破片がブーツを擦るようになった。リンはつまずくことが多くなり、呼吸も荒く、頭を下げて歩くようになった。アロディも何度かつまずいた。暗闇の中をのろのろとした足取りで進んだが、ソルターウッドが少しずつ薄くなり、壁にぶつかりそうになった。

冷たい、苔むした花崗岩に寄りかかっていた。数十フィート先で洞窟の口があくびさながら開いている。避難できる。

アロディは安堵した。常に監視されているような感覚が徐々に消えていった。

アロディは松明を乾いた岩の上に置き、火起こしの箱を開けたまま腰を下ろした。火打ち石と鉄を叩き、無骨な手袋一杯の火種に息を吹きかけ始めた。不器用で完璧とはいえない作業だったが、火を起こすのは初めてではない。松明にポッと火が付いた。

「何してるの」とリンは言った。しかし、彼女は震えていた。彼女の声は要求というより問かけに近かった。この状況が嘘であってほしいと願っていた。

「あのまま倒れるまで歩くつもりだった？ 忍び寄る隙を与えなければ安全でしょ」とアロディは言う。彼女はリンの前に進むように指示した。

アロディの頭上に松明を高く掲げ、洞窟の壁に沿って道を感じながら、洞窟の中へと進んだ。広々とした場所で夜を明かすことができればいい。生き延びる2度目のチャンスとばかりに、2人は急いだ。

松明は2人を導く星だった。歩くにつれて、アロディは松明が洞窟の天井を擦るのを感じた。遠くまで光が届くように高く掲げたかった。

「どれくらいこうしてればいいの？」リンは息を荒くしながら尋ねた。恐怖が後退した分、痛みが感覚を乗っ取りはじめていた。

アロディの喉はあまりに乾いていて、返事をする前に二度ほど咳払いをした。「私たちを外に追い出すのに苦勞するほど奥まで行ったほうがいい。どこか広くて、常に入り口を見張れるから場所まで行きたい」アロディは確信が持てなかった。確信が持てているように話せばいいと思っていた。「そしたら私が松明を持ったまま、数時間見張りをする。あんたはその間に休めばいい」

2人はトンネルの月明かりが差し込む部分を後にした。洞窟の壁は湿度が高く、石には時折小さな水滴が付着していて、手が滑るほどだった。地面の上で眠るなんて、とアロディは思っていた。でも、なんとか生き延びなければ、リンは生き延びなければならない。

背後の洞窟の壁で何かが擦れる音が聞こえた。

「シッ」アロディは松明を振り、あたりを注意深く観察した。薄暗がりの中、近くには何も見えなかった。しかし、音は2人が来た道から聞こえてくる。

2人は後退し、洞窟の奥深く、回廊をかき分けるように進んだ。前方で道が二手に分かれた。

アロディはリンが前にいることを確認しながら、ほとんど彼女を押しつけるようにして、左へ誘導した。

また迷路。今度の曲がり角では右に曲がり、道がUの字になっていることに気づいた。元の場所に戻ってきてしまったのだ。

斧の頭が石に当たるような音が洞窟に響く。

全員が恐怖で麻痺してしまう。アロディは動かず、ただリンを右の道に進むように指さした。彼女にはそれしかできなかった。リンは後ろを振り返った。もう一度前方を見た。そして、急ぎ足で前に進み始めた。自分が死にゆく馬と同じ運命をたどらないと信じて。

2人を追い詰めることはできない。アロディはもうひとつの道を進んだ。

濡れた壁を避けるように注意しながら、両手で松明を握り、できるだけ高い位置に掲げた。荷馬車をバラバラにしたものの正体を見たくなかった。しかし、生き残るためにはその姿を見るしかない。

アロディは数秒間、リンの呼吸が聞こえたが、そのうちそれも聞こえなくなった。擦れたり、ぶつかったりするような音も聞こえなくなった。「それ」を目にするのは彼女か、それともリンか。アロディは松明の光を追うように、新しい道を進んだ。壁に付着した水滴が変化していることに気づき、ほんの少し立ち止まってそれを眺めた。

松明の光よりも赤いものを反射して、キラキラと輝いている。

アロディが壁から目をそらすと、追手と目が合った。その胴体からは、まるでその緒のような触手が飛び出ている。その黒い歯茎の口には犬歯と大量の舌が生え、サメのような歯で覆われている。

目は穴のようで、無慈悲ではあるが無心ではない。あまりに鋭く。あまりに人間らしい。一昔前なら上品だった高級な絹糸が、ポロポロになって腰にまわりついている。彼女はボイスの母親の家で同じような服を見たことがある。両親の祖父母から受け継いだものだ。

一家の取り決めの恐ろしさが彼女を襲った。アロディは、彼らの事業が犠牲者を生むことを知っていた。しかし、こんなものに人を売ることができなかった。金のため？「これ」の飢えから身を守るため？一族の義務のため？

アロディは必死で松明をそれに向けて突き刺した。炎は聖なる武器だ。彼女は松明を大きく2回振り回し、前に身を乗り出して松明を怪物に押し当て、できるだけ距離をとろうとした。

炎が顔に当たっても悲鳴も反動もなく、ただただ彼女を睨みつけていた。そして、それは松明を振り払い、歯で彼女の喉を引き裂いた。

アロディは、池の底へ沈む石のように、ゆっくりと地面に倒れた。彼女は息を呑み、肺に空気を届けることもできなかった。

落とした松明によって照らされたリンが、足を引きずりながら通路の反対側を回っているのをアロディは眺めていた。

怪物は振り返り、2本の触手を鞭のように打ち付け、リンは叫びながら倒れた。

触手が彼女を引き寄せた。そして、喰らった。

アロディの頭は内蔵のように赤い血だまりに横たわっていた。何もかも

感じられない。彼女は目を背けようとしたが、できなかった。

闇が彼女を襲うには、あまりにも時間がかかりすぎた。



ようやく、獲物はじっくり時間をかけて餌にありついた。気が散っていた。

おぞましきものは、荷馬車の生き残りの2人が森の中を騒がしく移動するのを見ていた。洞窟の入り口では、背の高い方が松明で周囲を照らして合図を送っていた。

おぞましきものも獲物を見ていた。人間の豊かさの名残に包まれた、古の吸血鬼。キングスポートの人々と狩った獲物を共有し、人目につかず、家畜と交換し、それにより疫病を早く蔓延させるという賢いやり方を行っていた。

吸血鬼は本能に従っていた。自制心というものは持ち合わせていない。否定されることを受け入れなかった。生存者を求めていた。

とても敏捷だった。いまわしきものは、開けた場所で戦うことを望まなかった。

しかし、2人の生存者は洞窟へ入っていった。あえて追い詰められる行動を取った。機会を与えたのだ。

洞窟の入り口から血の臭いが漂ってきた。

その臭いはゼベディアを我に返らせた。

彼は背が高く、鼻筋が通っていて、真っ白な長い髪を下ろしている。顔は幅広で四角く、地味で青白いが、蜘蛛の巣状の黒い血管に囲まれたくぼんだ赤い目は、呪われていることをはっきりと示している。

ゼベディアはケジャンの宮廷で使われるような装飾の施された鎧を身につけ、腹部には鮮やかな深紅のプレートが横に配置されている。鎖につながれた小瓶は、鎧の首あてにしっかりと取り付けられている。小瓶には、一人で引き離そうと思った獣に追い詰められ、息を引き取る寸前まで行った川の緑青の水が満たされている。他人を助けるためにとった行動だった。それが子供のころの彼が知っていた、最高の善だった。

もう1人は、明るい髪色の女性。彼女は...誇らしげに見えた。傲慢とさえ言えるかもしれない。それでも彼は、彼女が本能と闘う姿を見てきた。彼女の残酷さを理解しながらも、それを利用し、あえて吞まれないように尽力していた。

彼の重厚な装備は、ソルターウッドでの狩猟で身につけるには珍しかった。通常であれば森の中を素早く、静かに移動したいと願うものだ。しかし、何十年もの間、彼はアニュレットのブラッド・ナイトの一人として召集されていた。これまでのやり方を変えるのは難しかった。彼の誓約から見分けがつきにくくなっていた。残りの人生は暗闇とともに歩む。

旅が不可能になるたびに、彼は誓約を思い出した。誓約を口にして、その通り生きられる者は滅多にいない。苦悩の中で、ジレンマの中で、彼はその誓約に従い生きてきた。ゼベディアは呪われた仲間を殺し、腐敗が進む前に無実の者を切り捨てたこともある。人間の後の人生は怪物的だった。それに立ち向かい、自分自身を維持しつづけるには、氷のような冷徹さが必要だった。確固たる意志が必要だった。

ゼベディアは夜空に死語を囁いた。影が彼の周りに霧のように立ちこめ、すね当てが石に擦れて出す音をかき消した。

洞窟の中の悲鳴は聞こえなくなったが、ゼベディアにはまだ吸血鬼が餌を食べるときのかすれた鳴き声が聞こえていた。彼は洞窟の中を素早く歩き、暗闇をものともしなかった。

通路はどんどん小さくなり、ざわめきが彼の耳に大きく響く。通路の曲がり角にさしかかると、吸血鬼が身をかがめ、触手で犠牲者の一人を抱きかかえ、十数匹のヤツメウナギのように彼女の身体に張り付いているのが見えた。

ゼベディアは荷馬車の犠牲者が生き残るとは思っておらず、この2人も例外ではなかった。しかし、2人の死のおかげで吸血鬼に対して有利に動けるのであれば、そのまま眺めていたほうがいい。脅威を終わらせること以上に重要なことはない。

ゼベディアは物理的な姿を隠すことはできても、匂いを隠すことはでき

ない。吸血鬼は彼を見るために振り向き、ギザギザの舌から蛇のような音を鳴らして立ち上がった。

ゼベディアの手に黒紫色の固い影の槍が実体化し、渾身の力で敵に投げつけた。吸血鬼が逃げられる前に、槍は喉を貫くようにしっかりと打ち込まれた。触手が飛び出し、その冷たい肉体を蝕む影を引き剥がそうともがいた。

ゼベディアの心の奥で、獲物が傷ついた姿に呪いが歓喜していた。その感情を抑圧した。

ゼベディアは膝を曲げ、手袋をはめた手に長槍を持ち、重々しそうに吸血鬼に近づいた。その傷口から流れ出る腐った血の匂いを嗅ぎたくなかった。回復される前に早く殺さなければならない。胸部に素早く2つの穴を開け、全身を緊張させて両手で攻撃をしようと構えると――

4本の鋸歯状の触手がゼベディアの喉と腕に巻きつき、肉を切り裂いた。その痛みはこれまで経験した何よりも凄まじかった。吸血鬼の100本の小さな歯が、吸い付くように傷口を開き、痛覚が火のように燃え広がっていった。吸血鬼の触手が収縮すると、ゼベディアの槍が手から落ちた。自分が引き裂かれていくのを感じた。

触手は彼の身体の中で合流した。ゼベディアの身は血だまりへと溶けていった。

吸血鬼は動きを止め、蛇のような音を立てながら腕を振り回した。触手を指のように宙を突きながら、前進していく。そして、飢えが満たされなかったことを思い出すかのように犠牲者の死体へと振り返った。

背後で真紅の血だまりが湧き上がり、不定形な身体のような塊が形成されていく。ゼベディアの手に握りしめられた長槍は、一本ずつ指を再形成しながら再び出現した。塊から血が滑り落ちると彼の人間の姿が戻り、吸血鬼の背中に飛びかかった。

ゼベディアは怪物を何度も何度も刺しながら、姿を見ないようにした。しかし、彼は衝動に抗えなかった。穴が3つ。4つ。5つ。その対称性と完璧にはじける黒と赤の色彩に、彼は恍惚とした。彼は無駄な攻撃を受けながら、ゆっくりと味わうかのごとく攻撃を続け、敵に屈辱を覚えさせた。

すると、触手がゼベディアの首に巻かれた形見に触れ、首当てから引きちぎってしまった。この吸血鬼は、以前にもブラッド・ナイトに狩られたことがある。知っていたのだ。

ゼベディアは地面に倒れ込み、大切な形見が石にぶつかる数秒前に受け止めた。吸血鬼の四肢は彼を包み込んだが、彼を真に拘束していたのは呪いだった。ゼベディアの皮膚は伸び、変化した。彼は屈服し、強さと飢えの両方で吸血鬼に匹敵するために筋肉と血の塊に成長した。

おぞましきものは獲物を真つ二つにし、触手と腐敗した腕を引きちぎった。赤紫色の血の爪へと変化した手で引き裂いた。

獲物は血にまみれていた。あちこちと身体をくねらせた。なんとかして逃げようともがいた。逃げることは不可能だった。

おぞましきものは止めることなく、何度も何度も激しく振り回した。

ゼベディアは犬のように頭を振った。彼の手は苦痛で躍動していた。正気を保つためにさまざまな方法で気を散らしていたが、痛みはもっとも明瞭にさせてくれた。彼は洞窟の壁を殴り、何度も殴るあまり1フィートほどの負荷さの穴をあけた。

吸血鬼の半身も削がれた肉が、彼の下に横たわっていた。もう半身は消滅していた。

血の痕跡が洞窟の外へと続いている。逃げられてしまったのだ。

彼はうなり声をあげて、再び壁を叩いた。吸血鬼は彼より素早かった。彼のことを知っていたのだ。まだ捕まえることは可能だ。今すぐに動けば、あるいは――

地面に倒れていた2人の女性のうち、1人の身体が痙攣した。そして数秒後、もう1人も痙攣した。また痙攣した。

息をそろえるかのように。

2人は何者だったのだろうか？ 姉妹だったのだろうか？ 何気ない話し方からして、恋人同士だったのかもしれない。

彼は吸血鬼を退治するためにここに来た。その呪いが広がるのを阻止するために。

なのにも関わらず、彼の選択のせいで、結局呪いは広まってしまった。彼の自制が足りないせいで。彼が槍を手にする前から、彼の呪いのせいで。

この2人の最高の善とは何だったのか？ 最高の償いは？

小柄な茶髪の女性はスリルを求める者で、喜びを感じることができて良い人生を送ることができるだろう。この世界がそうでなくとも、自分には価値があると信じていた。

もう1人は、明るい髪色の女性。彼女は...誇らしげに見えた。傲慢とさえ言えるかもしれない。それでも彼は、彼女が本能と闘う姿を見てきた。彼女の残酷さを理解しながらも、それを利用し、あえて吞まれないように尽力していた。

まだ救いようがある。彼は槍と形見を地面に置き、2人の前にひざまずいた。



アロディは震えた。全身で震えた。全身が彼女の思考や心から自由になるために動きたいと切望し、それぞれの手足が勝手にのたうち回った。視界はぼやけていて、暗闇のなかでかろうじて点のように見えた。

彼女の周りを視界がぐるぐると巡っていた。美しい鎧に血糊がべっとりをついた白髪の男が目の前にいる。

「お前は死ぬ」と、冷酷とも親切ともいえない声で言った。彼は聞きなれないなまりを放ち、発音は平易で素早い。「お前は穢された。これからお前に起こる変化は、お前の想像を絶するだろう」

彼は青緑色の液体が入った小瓶を彼女の頭上に掲げ、栓を抜いた。不明瞭な意識と暗闇の中、彼の動きは流動的でありながら、同時に緩慢としたものを感じられた。「お前に平穩を与えることができる」

彼女はうなずきたいと願った。願っただけで、身体は動かせなかった。

「それか、お前に時間をくれてやることもできる。1年か。10年か。それ以上かかるかもしれない」

アロディの身体は、どこか遠い所へ漂っているような感じがした。ほとんど彼の言葉を聞き取ることができない。しかし、彼女の注意を引きつけるには十分だった。

彼は少し高い声で話を続けた。「決して楽ではない。訓練を重ね、狩りをしなければならぬ。そして、自分の命を奪ったものよりおぞましい怪物として死ぬ。これまで善行を重ねていたとしても、お前の最期は今までお前が倒してきた悪と等しいものとなるだろう」

これまでの善行。彼女はリンを探そうと見渡した。失敗した。

早口が彼女の心を揺さぶった。「この道を歩みたいなら、誓え。己の血に誓え。」

アロディは喋れなかった。動けなかった。彼女は目で彼に答えた。



儀式は急がれた。詠唱や小瓶での沐浴を行い、洞窟の闇はまるで生き物のようにアロディの目に染みこんでいく。彼女は意識を回復しては失い、話し、聞き、断片的な記憶しか残っていない。

立つことさえも労力だったが、彼女は立ち続けた。呼吸をした。歯に舌を走らせた。元通りだ。自分の脈を感じた。血も今までどおり流れている。彼女の数フィート先であぐらをかいて座っている白髪の男性に目をやった。

2人の間には小さな水たまりのような露があった。アロディは、暗闇でも見えることに気づいた。これまで何度もしてきたように、彼女は自分の姿を確認した。

喉の傷は醜い縫い目のようになっていた。瞳はルビーに差し込む光のように輝いている。目の周りには、墓場の土のような色の毛細血管が広がっていた。

彼女は不可逆的な変化の衝撃を感じ、手放した。第一に「生きる」衝動が強かった。そして、二つ目は――

リンは引きずられたかのように座っていた。両腕はぐったりと脇に垂れている。顔は浅黒くなっていた。首や腕の皮膚に棘が突き刺さっている。喉の奥で、獣のような音を立てていた。

不思議と、アロディは今までもっとも弱く感じた。

「私にしたことを…」アロディは言葉を詰まらせながらゼベディアに言った。「彼女にして。お願い」

ゼベディアは首を横に振った。「彼女は手遅れだ。まもなく吸血鬼のしもべとなる。すまない。お前を救う時間しかなかった」

アロディに残されたのは、自分の善意だけだった。彼はそう言った。約束したではないか。

「もし...もし、私たちが吸血鬼を倒せば、彼女は...」喉が治りきっていないのか、記憶しているよりも声が荒かった。

ゼベディアは言葉を遮った。「一度本格的に変化が起きると、それを止めることはできない」

アロディは気分が悪くなった。彼女の目にはいつもと同じように、無駄に漏れる涙がわけもなく浮かんだ。

「なんで私なの？なんで彼女を選ばなかったの？」

ゼベディアは目をそらした。「我々の道は険しい。その道を歩むには、自分自身を理解していることが必要だ。一瞬でも自分自身を失えば...二度と戻ることはできない」彼女の方へ振り返った彼の目には、遠くを見るような眼差しがあった。「お前からは覚悟を感じる。少なくとも、お前には歩むチャンスがある」

アロディは荷馬車の人形たちのように身悶えしているリンに歩み寄った。言うことを聞かない腕と足でアロディに近づこうとしている。言葉になっていない音を出している。

アロディは彼女の目を覗き込み、瞳孔が赤く染まり、白目を徐々に浸食していくのを見た。

リンは何も返事ができなかった。そして、自分だけに眩く価値のある言葉はなかった。

リンの首に巻かれた青と金の豪華なアスコットタイは、見分けがつかないほど汚れていた。アロディはゆっくりとそれを解き、頭からかぶり、傷跡を隠すように首に巻いた。友人の形見だ。

彼女はゼベディアの方へ振り返った。尋ねることもなく。ただ、受け入れた。彼は自分の槍を彼女に手渡した。

アロディはその槍をリンの心臓に向けた。なんらかの反応があるのを待っていた。リンの目に信頼が映るまで。幸いなことに、彼女には見えなかった。

彼女は目を閉じ、本能のおもむくままに突き刺した。

